

「地球温暖化」の不都合な真実

マーク・モラノ著：日本評論社

今日、世界各地で気候変動が起きていることは事実のようだが、温室効果ガスは本当に地球規模の気候変動の原因なのだろうか。

アメリカで出版されベストセラーになった本書は、アル・ゴアやオバマなど民主党政権が支持してきた温室効果ガスによる地球温暖化説を科学的事実に基づいて論破している面白い読み物である。

人為的CO₂地球温暖化説は1980年代に登場し、1990年代から世界規模の大問題とされてきた。しかし、当初からこの説に疑問を持つ科学者たちもいた。

「97%の科学者が温暖化問題について合意した」などという話に根拠は見当たらないし、南極の氷は増え続けている。北極海の白クマの数も増えているし、海面上昇は10年間に2.5センチ程度で全く心配する必要がない。アメリカのマン教授が発表したホッケーのスティックに見えるグラフは、いまの気温が過去千年間で一番高いとほのめかす。IPCCの報告書に掲載され、世界中のメディアが取り上げたこのグラフも、根拠が疑わしいとも言われている。

温暖化説が疑われ始めたのは2009年に発覚したクライメートゲート事件と呼ばれる、温暖化説を支えた科学者たちのスキャンダルがある。懐疑派の論文を意図的に排除し、データを書き換えていた科学者たちの行動は温暖化説に対する信頼を損ねた。

それでも多額の費用が投じられているのは何故だろうか。対策費の殆どは各国の政府が支払っており、これは富裕国から貧困国にお金を流したい人たちが考えた仕組みだそう。

トランプ政権は「温暖化研究は血税のドブ捨て。今後予算はつけない。」と宣言した。民主党政権の政策は全てウソと決めつける共和党政権だが、CO₂だけを温暖化の主因とするのはホラー話だという意見ももつともなような気がする。アメリカでは今後とも化石資源がエネルギー消費の主役を担い、「一足飛びに再エネ時代がくる」などという風説は詐欺だといえど著者は断言する。地球温暖化問題を考えるうえで必読の一冊とお勧めする。

(シニアネットワーク会員 齋藤 隆)

エネルギーレビュー誌の書評欄 2020年2月号掲載